

## 反抗期ブルース

高橋 理子

私は反抗期の六年生である。以前と比べて言葉づかひも悪く、態度も悪い。周りも「もう少し穏やかにいったら？」「怖い」などと私の態度に不快な思いをしているのが手に取るように分かる。夏。言うことも聞かなければ、態度も悪く、勉強がわからなければ周りに当たり散らす。自分だけが不幸に思えイライラし、全く私のことを分かってくれない。

しかし、言うことを聞きたくないわけではない。本当はもっと言うことを聞きたい。いい子でいたい。それが私の本音だった。態度が悪くなければ注意もされない。周りの家族も楽しそうだ。それが出来ない！母は弟ばかりを可愛がっているように見える。えこひいきだ！むかつく。でもこんな態度の私なんだから、注意しないわけにもいかないだろう。ああ悪循環。自分が認められない。反抗期はややこしい。

母は会社に行きヨレヨレになって帰宅する。その日一日の疲労、ストレスが溜り、やっと帰ってくる。休憩もなく夜ご飯を作り食べ終わった皿を洗い、私に勉強を教えてくれる。その間に洗濯をし、アイロンもかける。なんでそんなことができるのだろうか。大人だから？私だっただろうなっているだろうか。「休憩がないからやる気が出ない。」「今日は疲れた。」とか何とか言っていて働かないだろう。なのに母は文句ひとつ言わず働く。私には不思議で仕方がない。

私には母に文句を言う資格などないだろう。そんなことはわかっている。でもやはり母に色々注意を受けると素直になれないのだ。私のことなど放っておいてくれればいいのだ。私になど関わらなければいいのだ。そして私も母に反抗することなどないのだから。そうだ、母が悪いのだ。やっぱり私ではなく母が悪いのだ。

夏休みの中頃それを思いついた私は思いのたけをぶちまけた。勉強がわからずゴロゴロしている私に母は注意した。私は窓を開け大声でどなり散らした。近所の人に、私がどんなに母に怒っているかを言いふらしたかった。母が困ればいいと思った。全部母のせいだ、ごちゃごちゃやるさいことを言うな。私に注意するな。母は黙っていた。静かにこう言った。「全部ママが悪くていい。それでもママはあなたに注意はする。唯一無二の娘だから。」でもあなたは偉いわねえ。自分が反抗期だっただけでわかっていい子になりたいって思っていて、ママの話も聞きたいって思っているのね。素敵。ママが反抗期の時はそこまで賢くなかったわ。ムカつく！で終わっていったわ。」

この時急に体が軽くなったような心がふわっとしたような気がした。ムカつくけど、うるさいけど、やっぱり母が好きだ。私の負けだ。お母さん、本当にありがとう。心の底から素直に言えた。もう一度「ありがとう。」